

令和2年度 第1回 岩手県生涯学習審議会・岩手県社会教育委員会議 議事録

1 日 時

令和2年7月14日（木）13:30～

2 会 場

サンセール盛岡1Fダイヤモンド

3 出席者（敬称略）

(1) 委 員

石川耕司、伊藤由紀子、小原貴人、菅野路子、菅野祐太、小向勝志、田口昭隆、中村利之、西里真澄、畠山大、半澤久枝、森川静子

(2) 事務局

教育長 佐藤博、教育局長兼教育企画室長 佐藤 一男、教育次長 梅津久仁宏、生涯学習文化財課総括課長 藤原安生、学校調整課総括課長 木村克則、学校教育課総括課長 中川寛敬、保健体育課総括課長 清川義彦、生涯学習推進センター所長 久慈孝、県立図書館長 小田島正明、県立博物館副館長 千田貴浩、県立美術館副館長 小笠原誠、スポーツ振興事業団事務局長 宮昌隆、文化財課長 岩淵計、生涯学習担当課長 佐々木義秋、特命課長 伊藤勝久、上席文化財専門員 半澤武彦、上席文化財専門員 花坂政博、上席文化財専門員 佐藤淳一、主任主査 川村信、主任社会教育主事 鈴木玲子、主任社会教育主事 高橋英樹、主任社会教育主事 岩淵忠徳、主任社会教育主事 松川仁紀、主任社会教育主事 三橋俊文、主任指導主事 片方元昭、社会教育主事 佐々木透

4 会議次第

- (1) 開 会
- (2) 挨拶
- (3) 委員紹介
- (4) 事務局紹介
- (5) 協 議
- (6) 閉 会

5 協議内容

(1) 令和2年度主要施策について

「生涯学習文化財課、学校調整課、学校教育課、保健体育課より説明（内容省略）」

—質疑—

【小原貴人委員】

資料4ページ、5ページに、指標として「読書がとても楽しいと感じる児童生徒の割合」がある。

本校としても、読書活動に力を入れており、よい指標と感じている。

数値目標を見ると、高等学校が、2019年度が41から2022年度に52と非常に高くなる。

先ほど、方策として「ブックリスト」についてあったが、特に高校生の数値を上げるための具体的な方策があれば取り組みたいと思うので、教えていただきたい。

【生涯学習文化財課 藤原総括課長】

盛岡二高は、読書委員会や生徒の自主的な活動などを通して、先駆的な実践をなされている。

中高生の読書がとても楽しいと感じる割合を引き上げていくためにであるが、「中高生のためのおすすめブックリスト」の活用を第一に考えている。

毎年、中高の図書館担当教員の研修会を実施していたところであるが、今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点で、中止せざるを得なくなった。そこで、それに代わるものとしてブックリストの好事例などについて、情報の周知を図って参りたいと考えている。

高等学校の様々な素晴らしい取組を情報収集し、周知を図って参りたい。小原委員におかれては、情報提供いただければ幸いである。

【小原貴人委員】

関連してだが、自校がどれくらいか調べてみたところ、昨年度は54%で高いが、一昨年度は、34%でかなり違う。

よくよくみたら、集計の方法、調査の方法が、一クラスの抽出ということである。これはこれで調査していただいて構わないが、学校教育課が行っている意識調査もあるので、そこにこの質問を入れることで、より正しいデータが得られて、生徒の意識付けにもなるのではないか。

【生涯学習文化財課 藤原総括課長】

担当課でも協議を図り、よりよい調査方法になるよう検討して参りたい。

【菅野祐太委員】

16ページのところであるが、震災があってから10年目を迎える中で、この「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」が一つ大きな柱としてなっているが、これから復興予算が、この10年を期に多分減らされていくのではと思っている。

学校調整課のカウンセラー派遣事業も、国としてどうしていくのかというところもまだわかっていないが、この社会教育の復興がどのような状況で、これに対して、国が支援をしていかなかった時に、県としても何か取り組んでいくという可能性があるのか。

【生涯学習文化財課 藤原総括課長】

現在、「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」を柱として、特に沿岸市町村、そして仮設住宅がある市町村に対して、復興交付金を活用しながら、いわゆる持ち出しがない、10/10という形で事業を進めているところではあるが、復興交付金については、委員の話のとおり今年度限りである。

そこで、1/3ずつの持ち出しにはなるが、国3分の1、県3分の1、市町村3分の1で、市町村にも

御負担いただき、その補助金を活用しながら、現在のその事業の継続を図って参りたいと考えている。市町村等の来年度の事業のボリューム、要望額等について、調査を進めているところである。市町村のニーズに合う形で、事業が展開できるよう努めて参りたい。

【半澤久枝委員】

当法人では、放課後子供教室をさせていただいている。

資料を拝見すると、すばらしい事業を展開されている。

質問であるが、今、放課後子供教室をスタートして、3年目を迎えているが、資料の4ページに、「放課後子供教室に指導者を配置して、体験活動実施してる教室の割合」とある。指導者というのは、私たちのことを言うのか、どなたかお招きした方のことを言うのか。

2022年には100%と目標が立てられているが、そのあたり、どういった形での進め方なのかお伺いしたい。

放課後子供教室のことが16ページに書かれてあり、指導者等合同研修会が年3回開かれているということで、実は声がかかったことがない。研修に参加できていないところもあり、この資料をいただいてから、今年度はいつなのかなと思ったら今日であった。

職員に聞いたところ、「申し込んだが抽選で漏れた」ということで、たくさんの方が申し込まれる研修会なのか、今、コロナウイルスということで人数制限をされての開催なのかというところ、放課後子供教室をやっている人が優先的に受講できるのか、それとも児童館とか放課後児童支援員の人も、同じフィールドで、抽選なのか。

できるだけ、県の研修に職員を参加させたいというところでの質問である。

それから、県南青少年の家に来週行くが、エアコンがないと言われた。今、小学校とか全部配備になっている。川遊びとかがあるので、涼しいこともさせていただきありがたいと思うが、検討いただければ、もっと県立青少年の家における満足度の割合が上がるのではと思う。

【生涯学習文化財課 藤原総括課長】

まず、1点目の放課後子供教室に指導者を配置するという指導者についてであるが、こちらは、子供教室で言えば安全管理員とか、学習の支援員とか、そういった方々、児童クラブで言えば、支援員となるが、いわゆる常駐している方々で、その方々が、体験活動等々の事業も行っていただくという意味である。

2つ目の研修会についてであるが、情報がこれまで行っていなかったというのは、大変申しわけございませんでした。

生涯学習推進センターから、市町村の教育委員会や保健福祉部局をとおして、放課後子供教室、放課後児童クラブへ周知を図っているところであるが、再度、周知の漏れがないような形で、市町村の方に依頼をかけていきたい。

今回は、コロナウイルスの感染拡大防止という観点から、人数を絞っての研修会とさせていただいている。

例年であれば、お申し込みをいただいた方々全員対象で、研修会に御参加をいただいているところであるが、今年度このような状況であるので、御理解をいただきたい。

各クラブ、教室、まず、1名ということ的前提としながら、すべて公平に抽選をさせていただいて

いる。

残念ながら抽選に漏れた方々には申し訳なく、また次の機会ということになるかと思うが、できるだけ、今回、研修いただいた内容についても、まなびネットいわてのホームページをとおして、周知を図って参りたいと考えている。

青少年の家のエアコン関係については、今後の検討課題とさせていただきたい。

【菅野祐太委員】

要望になるが、コミュニティ・スクールの設置市町村数のところが目標を下回っている。

コミュニティ・スクール事業について、今、大槌高校で地域学校協働事業をやっている。

高校のコミュニティ・スクールを進めていく時に、2つの観点を入れてコミュニティ・スクールを作っていくって欲しい。

学校運営協議会を設置したからコミュニティ・スクールになるというのではなく、「まち・ひと・しごと」の中でも触れられていたが、高校教育が地域振興の核であるということ、もう1回再認識しなければと思っている。

高校生が出ていくと地域が活性化する、地域が社会教育の場になっていることを、やはり意識しながら進めていかなければならないなということと、先ほど中川総括課長仰っていたが、探求的な学びをしていくためにコミュニティ・スクールがどう関わるのかという観点を入れて、コミュニティ・スクールを考えていかなければと思っている。

その観点を入れてコミュニティ・スクールの運営をやっていきたいと思っているので、よろしくお願ひする。

—休憩—

(2) 今後求められる施策の方向性について

「新しい時代の岩手の生涯学習・社会教育

～岩手らしさを生かした生涯学習・社会教育施策の方向性について～」

【中村利之委員（議長）】

それでは本日の次第の二つ目に入る。各委員は、生涯学習審議会委員及び社会教育委員会議の委員として県の施策等に対して、御意見なりを出していただきたい。

本年度は、新しく委員改選もあり、新たなテーマでもって出発ということになる。

最初に事務局から説明、そのあと、各委員から御発言をいただく。

【事務局説明（概要）】

今期のテーマであるが、「新しい時代の岩手の生涯学習社会教育～岩手らしさを生かした生涯学習・社会教育施策の方向性について～」とし、議論を進めていただきたい。（略）

今回のテーマで御協議いただく上での新しい時代の捉えとして、先ほど申し上げたような、社会の変化や、新たな課題に直面する時代であるとともに、希望を持ち、目指す姿である「お互いに幸福を守り育てる岩手」を主体的に実現する時代とした。

その新しい時代における様々な変化への対応や、課題解決のための岩手の生涯学習・社会教育、そして、目指す姿の実現を支える岩手の生涯学習・社会教育の方向性について御議論いただき、県の施策に反映させて参りたい。

また、変化への対応と申したが、本県のよさについては、継承していくことも大切と考えており、そこも含め、御議論いただきたい。(略)

本日の協議について、2点。

1点目として、テーマについて、課題であるとか御意見等、委員のそれぞれのお立場から、自由に御発言をいただきたい。

2点目として、副題になるが、「岩手らしさを生かした」について、御意見をいただきたい。特に、本県のよさであったり、本県ならではの学びについて思うところをお話いただきたい。

本日の協議でいただいた御意見を事務局にて整理し、焦点化した内容で2回目以降の協議を行っていく予定である。

【中村利之委員（議長）】

第1回ということで、視点全部にわたってというよりは、新たなテーマについてそれぞれの立場から考えること、それから、学び続ける環境づくりで課題に思っていること、地域の課題があれば、その辺りで御発言いただきたい。

目指す姿については、これから2回3回4回目でまとめていきたいと思う。

岩手らしさを生かしたについても、岩手のよさ、強みは何だということを含めてお話いただきたい。

今年は特に新型コロナウイルスでもっているような面で変わっている。新しい生活様式、テレワークだとか。そういう面でもう社会情勢変わったということを考えてもいいテーマである。

これからの岩手の生涯学習・社会教育の方向性考えるということになる。

【森川静子委員】

「いつでも・どこでも・だれでも」ということが述べられているが、今回のコロナの対策についても感じたところだが、岩手県の県土が広いとか、高齢化が進んでるといようなことから、移動の難しさとかあるだろうと。盛岡でしか学べないことがあったり、首都圏じゃなきゃ学べないことがあったりというようなこともある中で、リモートの可能性が見えてきたと思っている。

コミュニティのことを考えると、またそれは別の問題であり、また制限もあり、お金もかかることかと思うが、そこに可能性を感じた。

それから、岩手らしさについてであるが、岩手のよさということについて、やはり復興教育の実績があるということ、そして、防災教育のノウハウを持ったところが強みかと思う。

この内容を教振でも取り上げていくことが謳われていたが、教育振興運動は、まさに岩手のよさであり、強みと思う。

ここには、本県のレベルの高い学校保健会も連動しているということで、それも素晴らしい。

例えば、早寝早起き朝ご飯、読書の推進、メディアとの付き合い方といったような様々、子供たちの健全育成のために地域ぐるみで取り組んできている。

地域の大人が、子供を見守り育てるとい、そういういい面がある。

例えば、これは私見であるけれども、岩手から大谷選手みたいなスポーツ選手が生まれているだと

か、それ以外にもたくさんのスポーツ選手、それから、盛岡二高のお琴とか、不来方高校の合唱みたいな文化的にも素晴らしい活躍がある。

これはまさに、教育振興運動の要素が絡んでいるはずだと思っている。

更に、コロナの感染者が、今のところまだ数ヶ月経ってもゼロということが維持されているが、これは人口密度の問題だけでなく、岩手の気風というか、子供のお手本であろうとする大人がいて、真剣に予防対策をしようとする子どもがいるというような気風というか人々の気構えがあり、それは、やはり長いこと50年以上にわたって教育振興運動が岩手に根づいてきたということと、全く関係がないということではないだろうと私は思っている。

この岩手らしさの象徴ということで、教育振興運動を大切にしたいと考えている。

【石川耕司委員】

本校では、昨年度、教育振興運動の発表校になり、発表させていただいた。

その中でも、教育振興運動が、やはり岩手県の一番の誇りだという話があった。

本校は、特に読書活動を一生懸命やっているが、読書を通じて地域や保護者の方たちと一緒にということも考え合わせてきた。

今問題になっているのがSNSの問題で、本校はそれほどでもないが、やはり盛岡市では、問題が多く出ている。

夜、9時スタートとか10時スタートとかがあったり、色々な方たち、大人の人が子供のふりをし一緒にやったりとか、そういった形での問題行動が起きてる。

更に、そのリターンで不登校の問題が出てきて、結局夜遅くまでやってると、朝起きれないと。

そういう形での不登校で、盛岡市では今まで最高の不登校児童になっている。中学校は減っているけれども、今そういう状況である。

そういう中で、無くしていくため、少なくしていくためには、やはり学校だけではなく、保護者や地域を交えてやっていかなければ、これは中々難しいことなのだと思う。

更に3世代というところ、本校は3世代交流をかなりやっているが、それ以外のところでは中々難しくなっている。

それを担うためには、やはり活動センターとか公民館とか、その地域と核となる、そういう地域施設が、やはり中心となってやっていくことが大事なのかなと感じている。

そういったところで、今、小学校の方では不登校というところでの問題が大きく出されている。

それには、地域の部分がすごく大事になってくると思っている。

【小原貴人委員】

最初に、「いつでも・どこでも・だれでも」という部分だが、高校では昨年度から総合的な学習の時間が探求の時間になり、生徒それぞれがテーマを見つけて研究活動を行っている。

その中で、やはり岩手の課題というところをテーマに設定している生徒が非常に多くなっていると感じている。

委員会活動でも、本校の家庭クラブ委員会が長年岩手の大きな課題である減塩、これについていろいろレシピを考案したりしてやっているが、そういう岩手を知りたい生徒にとってみると、例えば岩手をテーマとした講座かなり開かれているようだが、そういうものは、生徒にとってすごくいい学び

と思う。

しかし、そういう公開講座に生徒たちは時間的に行けないと思うので、例えば、オンライン講座とか、そういうものであれば非常に学びやすいのではないかと感じている。

岩手のよさについては、復興教育を通じて地域社会に貢献したいと考えている生徒が多いことである。昨年度まで宮古工業高校におり、宮古工業高校の生徒たちは、自作の津波模型と造波装置を使って疑似体験を15年やっている。

合わせて、宮古工業は津波で浸水したので、その時の写真を展示したり、津波のメカニズムについてプレゼンをやっている。

そして、色々なところから高い評価をいただいております、生徒たちの自己肯定感にも繋がり、学びの活性化にもなっている。

そういう活動をしている生徒は、やはりその地元での定着率も高いと感じているが、それで終わらせないで、是非そういう経験をした生徒が、小学生とか中学生に対して、社会教育の中でリーダーというような形で活躍できるような場を与えていただければ更にありがたい。

小中高の意識調査の中で、学校や地域が行う体験活動に今後も継続して参加したいかという問いに対して、80%以上の小中高が、継続して地域の行う活動に参加したいと思っている。部活動の加入率も、全国でかなり高いので、学生時代の体験学習や部活動経験を、何とか社会教育の中で引き続きできるような、そういう受け皿を作っていただければと思っている。

【田口昭隆委員】

子供たちを取り巻く環境が劇的に本当に速いスピードで動いている状況で、本当に親もそれに追いつくのに精一杯という状況で、もっともっと私たちも先を見た行動をしなければいけないと思うが、何と言うか、それでも、やっぱり変わらず、学校と親と地域という連携を取りつつ、昔から変わらず郷土愛等を育む教育は進めていかなければいけないと思う。

昨今の子供に思うのは、やはり自己肯定感が少し低いというところがあるので、もっと自分自身に自信を持ってもらえるような何かがあればいいんじゃないかと思う。

先ほど石川委員も仰っていたけれども、不登校問題は、最近のそういう状況でのことで、そういった意味で不登校問題を解消できる新たな仕組みづくりなりを、またここ数年で考えていくのがいいのではないかなというのがある。

【中村利之委員（議長）】

沿岸では復興の問題もあると思うが。

【菅野祐太委員】

私は神奈川県横浜出身で、大槌町というところ、岩手の教育のよさっていうことを改めてすごく感じている。それは、やはり目の前に、リアルな課題があるところが1番の魅力だと思っている。

それを、やはり子供も大人も、高校生とか、中学生の生徒たちが、触れていくことはすごく重要だと思っている。

都会では、わかりやすく「これが課題ですよ」というふうに塾とかが提示してくれるので、すごく商品的な学びではあるがある程度成果に結びつきやすいけれど、岩手ではそれが見えにくくなって

いるところがあるので、誰かが、どうにかしてそこをカリキュラムにするとか、動線としてツアーにできるかということが必要だと感じている。

今やっている取組として紹介したいが、高校生のズームでの哲学対話を始めた。

それは、10人ぐらいの生徒達が集まってズームで議論していく。オンラインでの放課後の学びである。そこに、東京の非常に有名な学校の生徒が入ってきて、大槌高校で学ぶ方がよっぽど面白くて学びやすいと言っていて、本当にリアルな、何のために勉強しているのかみたいなことを気づかせてくれるのが地方の教育だと言っていた。

2つのギガを作ることを取り上げたいと思うが、ギガスクールは、別にメガバイトからギガバイトになったとそういう意味ではなく、「Global and Innovation Gateway for All」という言葉の頭文字を取っているのだが、例えば、社会教育の中で、どこの学びとのゲートウェイをオンラインでつないでいっていかうということがすごく重要だと思っていて、やはり公民館とかが貸し館施設みたいになってしまっているので、学校がそのゲートウェイになり得るということを、社会教育としてどう強めていけるかが重要なんじゃないかと思う。

やはり、それを地域資源だけでなく、オンラインで全国の資源とつなぎながら自分たちの地域のよさをどう築いていくか、そういう観点も重要なんじゃないかと思う。

【小向勝志委員】

私がいるセンターは、久慈市の中でも市街地を抱えており、海に面している。

センターで、成人教育等の事業を企画しても、中々人を集められない。

この41ページの人口構成で言えば生産年齢人口のところ。

多分、ニーズはあるのだろうが、中々人が集まらない。そういう状況がある。

実際、人数ベースで言うと、センターの利用者は、高齢人口の人が、8割を超えるような状況。

皆さんお忙しく、センター事業等には中々関われないというような状況もあるかと思うが、ここをどう取り込んでいって、地域の力を上げていくかということが課題だなと思っている。

あと、地域の固有の文化、例えば食文化、例えば、海藻類とか食べられる種類のもものが結構あるが、子供たちは、名前もわからないし食べ方もわからないというようなことがある。

同じようなことが山菜類、野草ということもある。

そういったことを、どう岩手らしさという中で継承していくか。

この辺に取り組んでいければと考えている。

【畠山大委員】

今年度からこちらの委員を引き受けたので、全体の状況を勉強させていただいていた。

今回のテーマは、「新しい時代の岩手の生涯学習・社会教育」という話であるが、こちらに移ってくる前に、別の自治体で似たような審議会の委員をしていた。

そこと比べた時に、非常に活発に審議会意見が出るというか、質問が出ている様子が見えて、それが一つのよさになると感じた。たくさんの地域の人たち、教育問題に関わっている大人たちが、岩手の教育のことを、これだけ真剣に考えているということが、一つの大きな要素のかと思い、今日拝見していた。

それが、具体的な形になっていくにはどうしたらいいか、というその部分が、おそらく問われると思う。

その時に、今日お示しいただいた資料を拝見すると、社会の変化ということに関しては、かなり具体的な事例が上がっているが、それが岩手県の現状にどう影響を与えるのかという分析、その部分が明確になっていかないと、せっかく目指す姿が明確になっていて、社会の新しい変化、日本全体、世界全体の変化が見えているのに、岩手県がどういう変化を受けていくのか、もしくはどういう変化を作っていくのか、そういう部分が具体的でないと、今後の方向性というものは見えてこないのではと思う。

この委員会で、このように活発に話が出てくるので、そうした部分が出てくると、方向性として見えてくるのではと思う。

【半澤久枝委員】

児童館と、矢巾町の駅前の複合施設で子育て支援の階（フロア）を運営していて、やはりコロナウイルスで4、5月中旬までは閉めていた。

テーマの中に、「いつでも・どこでも・誰でも」があるが、今新型コロナウイルスで、外出規制とか自粛とか、あまり人と交流しないところ、そこに着目して私たちができることがないか考え、届ける支援をしている。

2月下旬に、家庭教育の研修に参加させていただいた時に、アウトリーチに力を入れて全国的に取り組んでいるという内容もあり、届ける支援に力を入れている。

どのようなことをしているのかというと、遊び場は今予約制になっていて、1時間遊んだら帰りたいになっているが、合間に消毒したり、おもちゃの入れ替えをしたりして、ウイルス対策を施して次の利用者をお迎えすることをしている。

その中で、短時間しか遊べないとか、人との交流をまだちょっと控えたいというお声がたくさんあり、おもちゃの無料貸し出しをすることにした。

ホームページで何番というのを選びメールをもらい、用意しておき、取りに来てもらう形で、来られたときにちょっと会話をしたりというのを今一生懸命取り組んでいるところ。

いわて県民計画の「いつでも・どこでも・誰でも」というところを、一生懸命これからもやっていきたいと思う。

利用者の感想は中々聞くことができなかったが、（おもちゃの貸し出しの）メールのやりとりとかで「感想を書いて戻してくださいね」というと、「うちの子は障害者なので、家でしか遊べないので、家で遊ぶとかそういったものを充実できる」「おもちゃをお試しできる」「いろいろなおもちゃを1週間レンタルできるが、そういった取組もありがたい」とかあった。

あとは、お母さんが「子供が楽しそうに遊ぶ姿を見てとても心が和む」と書いていることがあった。

そういったところから、更に、工作ができるキットを差し上げる活動もしている。

家でそういった工作ができるとか、家庭教育に繋がるような取組にしていったらいいかと今走り出したところで、まさにこのテーマの「いつでも・どこでも・だれでも」ということは、とてもいいテーマだと思った。

【西里 真澄委員】

あそび ma・senka の活動では、いわて子どもの森の「いのちのおはなしキャラバン」の協力を行っている。仕事としては、助産師教育を行っている。

思春期教育において、普段感じている課題についてお話しさせていただくと、先ほど来、委員から不登校の問題とかが出ているが、やはり家庭の形が多様になっているので、子供たちは、相談する大人だったり、信頼できる大人に繋がることができずにいるような印象がある。

7月は、思春期の講演会が立て込む時期で、今年実は延べ8回の講演を行っているが、その中の中学生から寄せられた感想に、昨日まで死にたいと思っていたとか、いなくなりたいという感想が非常に多く見受けられる。

授業のお話があった時に、生命尊重だったりとか、かけがえのない命に対しての教育を重点的にとあったこともあり、私がお話する部分もそこに集中してしまうために、子供の感想が、そういう部分に偏るのかということも思ったけれども、学校の先生方からも、これだけ死にたいということが活字に上がってくるのは、衝撃だということがあった。

それと、「いつでも・どこでも・だれでも」ということについては、「どこでも」ということに関して、スマートフォンだったり、インターネットがやっぱりキーになる。

お母さんたち、非常に利用しているけれども、子守もスマホにさせてしまって、家庭教育が、スマホに持って行かれてしまっているような懸念がある。

子供も非常にスマートフォンに依存している。

健康の点に関しても、非常に心配だと思っているところ。

それから、「だれでも」ということに関しては、障がい児だったり、社会的養護に置かれているような子供だったりとか、その家庭に対しての家庭教育のあり方という部分においては、やはりいろいろな心配だったり、取りこぼしがあるように感じている。

【伊藤由紀子委員】

課題や現状等は、他の委員から出していただいたとおりに思う。

一関小地域では、現在200名以上のボランティアが登録しており、昨年度は、延べ人数で500の方がボランティアとして、活動していただいた。

教員の人員削減などもあり、今年度も含めて一年生の給食のサポートボランティアなど、そういった形で参加していただいている。また、この自粛の時期に、ボランティアがマスクを作って、寄贈するというようなことも取り組んでいる。

それで、やはり地域の方が、子供たちと関わるというのは、すごく些細なことであっても大事なことじゃないかなということを、日々の活動として感じている。

【菅野路子委員】

新しい時代の定義の中で、社会の変化ということがある。

世の中もインターネット社会になっていって情報化も進んでいるという中で、いろいろなアンケートとか、そういうものをインターネットで取るということを行っている。

世の中、高齢化ということで、その生涯学び続けるということからして、「いつでも・どこでも・だれでも」の、その「だれでも」の部分に、インターネット機能を使えない世代というか、若い人で

も使えない、そういう人にも情報が行き届くような、何か手立てが欲しいというのは常々感じている。

最初の説明で数字での報告があるのだが、例えば、満足度の割合という項目があり、その満足度というのを91%とか数字が表しているのだが、その満足度の内容というのが、具体的にどこかで見える形のアンケート集計があれば、これからどういう取組ができるか、ということがあるのではないかと思う。

アンケートを取って、その言葉に表れることで気付かされることがあると西里委員も仰っていたが、本当にその通りだと思う。

数値の後ろにあるものが、見える形のものであればいいと思う。

【小菅正晴委員（書面）】

（テーマについて：課題等）

GIGA スクール構想により、ICT が教育の手段として重要性を増す中、家庭におけるネット環境に社会や大人がどう関わっていけばよいか。

（「岩手らしさを生かした」について）

「岩手らしさ」を取組の視点に入れたことは素晴らしい。「体験」「読書」による学びを柱に岩手の強みを生かせるのではないか。

【中村利之委員（議長）】

一通り、各委員方から御発言をいただいた。

未来を担う子供に関する話題が非常に多かったと思う。

一方では、指導的立場にある大人の状態がどうなのかという問題もあり、いわゆる高齢化というような問題もあった。

切り口としては、今日は子供の話題が非常に多かった。

更に御意見があればいただきたい。

それぞれの立場で、先ほどは御発言をいただいたので、更に御意見を聞いて、ここはこう思った、ということはないか。

事務局から、この方にこのところをもう少しというのはあるか。

整理していただいて、次回、深める協議題が出てくると思うので、今日はここまでということにしたい。よろしいか。

以上で、私の本役割を終えたい。

(3) その他

なし

6 閉会